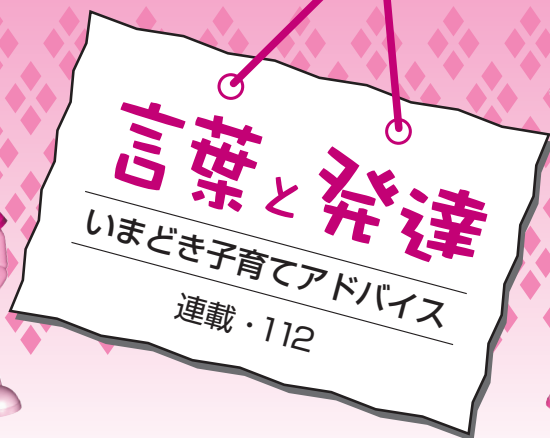




「ことばの遅れ」 とは？（4・最終回）



言語聴覚士 中川信子

新年号が同時に「最終回」というのは
ミスマッチ。計画性のなさが露呈。

でも計画性がないのも、考えようによつては自由な発想ができるとも言えるのでは？ ものごとは常に多面的にとらえられるし、その多面性の中のポジティブな方を採用していくことが、夢を叶えるコツかななどと、言い訳をしてみました。この言い訳、かなり本気です。ポジティブシンキングのすすめ。

ともかく最終回を始めます。地域住民の心身の健康を守るといふ仕事は目立たず、かつ、評価されることも少ないですが、悩み多き保護者たちを支えるお仕事、よろしく願います。全国にたくさんいる同じ思いの仲間たちのことを思い、今年も共に努力しましょう。

3回目までのまとめ

「ことばが遅い」―音声言語の発達が

遅いお子さんについて、おおむね1歳半過ぎから3歳過ぎ程度を念頭に置いて考えてきたのは次の通りです。

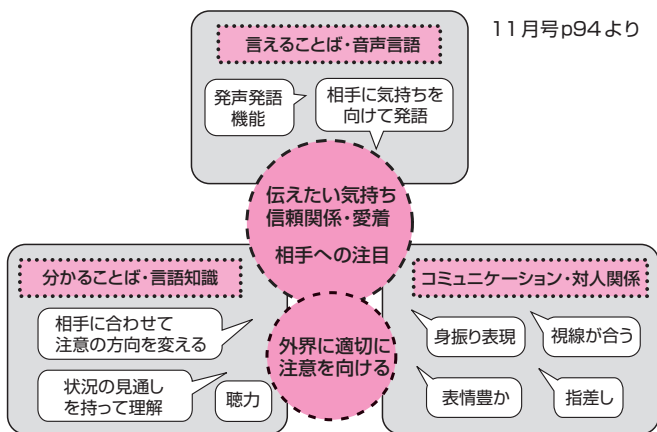
1) まず最初に聞こえ、聴力を観察。保護者からの聞き取りも含めて。なぜなら、聴力は「ことば（音声言語）」獲得の入り口だから。

ただし、「ことばの遅れ」が主訴で、実際に聴力障害が要因のお子さんとは、ごくごく少数なのも事実。保護者の気持ちに余計な負担をかけないためには、即座に聴力の精密検査票を出さずにおくことも選択肢の一つ。経過をフォローして、ことば（音声言語）が増え、コミュニケーション上の問題が軽減すれば、特段聴力検査にこだわる必要はないという結論を導き出せます。

2) 理解（認知）のようすを知る

その方法は次の3つに分けられます。

- ① 保護者からの聞き取り
- ② 行動観察



- らの働きかけでは目を合わせてくれない。
- ② 指差しの出現（問診票、聞き取りでも可）
 - ③ 要求表現（問診票、聞き取りでも可）指差しではなく、保護者の手をとつ

③ 客観的なテストを行う

①の保護者からの聞き取りでは、日常生活での保護者なりの「伝わりやすさ」の工夫が反映されるため、子どもの実像以上に「分かっている」との答えになりやすい点を勘案する必要がある。そこで埋めるのが②の行動観察。

実際に声をかけて反応を観察します。音声言語のみの働きかけで分かるのか、視覚的手がかりや、身体への働きかけがさらに必要なか見てみます。また、実際の観察で注意の向け方が適切なかどうか、コミュニケーションの取り辛さ、一方通行的なところがないかも一緒に見ることができるとでしょう。

スタッフ側が使いなれたおもちゃを使い、やや統制された場面での働きかけの反応を見るのも助けになります。そのため優れたおもちゃが役立ちます。

③は質問紙や、簡便なテストを用いることによって、質問―応答関係や、

てやらせようとするクレイン現象は、コミュニケーション発達のつまずきを予測させる行動。

④笑顔が見られ、表情で気持ちを読み取りやすいかどうか（伝達性が高い）

⑤気持ちの移り変わり（注意の持続）遊びが持続しない、不意に別のおもちゃに気持ちが移る、あれにもこれにも手を付けるが深まらない。

ex すべり台をすべり終えた後。通常は台の下で一瞬の「間」があるはずなのだが、その「間」がなく、即次の行動に移っている。

⑥ こだわりに類する行動

注意の向け方の偏り（偏ったもののみ注意を向けさせる脳の仕組み）が関与していると考えられます。顕著なものではじゅうたんやタイルの色の境い目に注目してその線に沿って歩く、天井のあかりをちらちら見る、入り口の戸の開閉にこだわるなどです。

理解のようすを把握するものです。健診場面でよく行われる、カードや図のポインティングも入るでしょう。反応は記録しやすいものの、周囲のざわついた状況も影響するので、検査結果を鵜呑みにしないことも必要です。

3) コミュニケーション、注意の向け方を見る

11月号の図を再掲します。「ことば」の力の核は「伝えたい気持ち」相手への注目、信頼関係・愛着」「注意を向ける力」ですが、いわゆる軽度発達障害のお子さんたち（LD、AD/H D、高機能自閉症等）のいずれにも共通するのが、この部分での弱さです。

そのことが、行動面でのさまざまな不思議さや問題を生じさせます。

短時間に見るためのポイントとして

① 視線が双方向に合うかどうか
視線は合うが、子どもの興味が向いている時に限られていて、大人の側か

⑦ 集団場面では観察が難しいですが、個別相談ですと入室退室時に見られやすい行動特徴。○入室時、周囲の様子におかまいなしにどンドン入ってきて手当たり次第におもちゃで遊ぶ。○退室時、視線を合わせてバイバイしてくれたものの手の向きが逆。入力した情報をいったん自分の身に置きかえて出力すれば、逆手にはならないはず。逆手のバイバイは情報の取り込み方に何らかの問題があると予測される行動。

「アスペルガー障害」の可能性
のある愛すべきお子さんたち

平成18年10月号「ことばの遅れとは？」連載第1回の図1（P92）で「ことばが遅い」ことの内容として左の4つを挙げました。

- 1) ことばを言わない。でも「何でも分かっている」
- 2) ことばは言うが、ほかの子と比べ

ると遅い

3) ことばを言わない。行動面、理解面でも心配な点がある

4) ことばは言うのだが、行動面で心配などところがある

1) 2) 3) について、今まで寄り道しいしいお話ししてきたつもり。読む方たちには意味不明だったかもしれないと反省しつつですが。

さて、今回お話しするのは、4) のお子さんたち。多くの場合、経過フォローとともに、アスペルガー症候群の特徴を示すようになる子どもたちです。

「ことばは言うのだが、行動面で心配」とは？

発達障害の診断基準として多用されるDSM-IVは、子どもの症状に○をつけ、決められた数以上にあてはまれば「診断!」。極めてドライなやり方です。インターネット上でこのDSM-IV

を見つけ、お子さんに自分で診断名をあてはめて安心した、とおっしゃる親御さんも数多く見られて、このいかにもアメリカ的な方法がもたらした明快さは一方で評価できるとしても、実際の子どもたちの状態にあてはめると「ちよつと合わないな」と思うことも。特に、高機能自閉症とアスペルガー症候群の見分けは、とほほほ、状態であるものを、分別しようということ自体に無理があるというのが、現場の臨床家たちの一致した感想なのですが。さて「ことばは言うが、行動が心配」なアスペルガー症候群は、上記DSM-IVの診断基準の項目の一つに次のような内容が挙げられています。

D 臨床的に著しい言語の遅れがない(例えば2歳までに単語を用い、3歳までに意志伝達的な句を用いる)

簡単に言えば、広汎性発達障害(自閉

症のグループ)の中の一つだが、ことばが遅れない状態ということ。でも実際には、コミュニケーションを含めた「ことば」に遅れや不思議なところがあることがほとんどです。

あるお子さんの場合



何人かのお子さんのエピソードを合わせて「ことばは言うけれど……」を再現してみます。

1歳6カ月…有意語2語。ただしオウム返しで、自発語かどうか不明。

1歳8カ月…絵本を指差しその名前を言いほしがる。絵本の中で同じ物を見つけると、指差してお母さんに伝える。視線がよく合う。日常のことばかけは理解。ただし、天井のあかりへの注視、回るおもちゃを目を細めて見る独特の行動。バイバイが逆手。ひたいにしわをよせ難い顔。笑顔は時々。

2歳…2歳3カ月…単語急激に増加。

コミュニケーション取りやすくなる。2歳3カ月…2語文出現。ただし、イントネーションが一本調子。時に語尾が上がる。要求表現は終止形(「○○飲みたい」ではなく「○○飲む」)。

2歳6カ月…3歳…ことばや文章は増加。自然な抑揚の会話。終助詞(「○○ね」)出現。けれども、セリフのように意思疎通の実感が希薄。クルマ博士。相談室に「いらつしやいませ」と言いながら入室。「ママにあげなさい」と言いながらままごとをママに渡すなど場面にそぐわないことばの使い方。表情はやわらぎ、笑顔が増えてくる。

3歳…4歳…大人の質問に対して「うん」とうなずいたり、ちゃんと返事するようになった。反面、遊びでは決まりきったパターンのものが多い。幼稚園に入園後は、園であったことをこと細かに説明してくれる。

4歳…決まりごとにしられる。

ex「ママと先生(ST)が話している間、遊んで待っていてね」と言われて来所。STが前の保護者との話が終わらないため、座って待っているママに何回も「先生とお話して」という(ママが先生とお話||僕は遊ぶ。ママが先生とお話||僕はいない||僕は遊べない)。

言葉は豊富だが、場面にそぐわないまたは、感情のこもらないことばの使い方。「では僕も入れてもらいましょうか」と言いながら入室。抑揚が少なくセリフを言っているように聞こえる。

幼い時期から子どもの状態の理解を進める

アスペルガー症候群に属するお子さんに限らず、「ちよつと変わった」「ことばの遅い」お子さんは、みんなと同じようにさせようと強制せずに、育ちの特性を保護者に理解してもらうこと

が幸せな親子の生活への第一歩。

幼いときから子どもの特性を知り、混乱させないように接してあげることができれば、とても愉快な、楽しい人たちに育つこともできます。

「障害」名や診断名はそのため役立たずなら使えばいいし、使わなくても望ましいかわりができるなら「こだわりの必要なし」が私の立場です。

そのために必要なのが、楽しい遊びの時間、ポジティブな子どもの見方とそれに由来するゆったりした受容的なことばのやりとり……なのだ。と結論的に、思っている私でした。

そんな思いを的確にすくい上げてくださる編集者が現れて、新しい本ができました。『ことばの遅れのすべてがわかる本』(中川信子監修 講談社)です。「すべてがわかる」とは思いませんが、「少しだけは見渡せる」のではと思っています。お役に立てばさいわいです。